

オンライン授業における聴覚障害学生支援の工夫と課題

— 大学生へのアンケート調査の結果から —

野崎 義和*, 及川 麻衣子**, 前原 明日香**, 佐藤 晴菜**
寺本 淳志*, 松崎 丈*, 植木田 潤***

Ingenuity and Issues When Supporting Deaf and Hard-of-Hearing Students in Online Classes
: Online Surveys of University Students

Yoshikazu NOZAKI, Maiko OIKAWA, Asuka MAEHARA, Haruna SATO
Atushi TERAMOTO, Jo Matsuzaki and Jun UEKIDA

要旨: 大学生への調査を通して、オンライン授業での聴覚障害学生支援の工夫と課題を整理した。聴覚障害学生は、周囲に人がいないことによる心細さはあったものの、オンライン授業の利点も感じていた。遠隔情報保障に携わった支援学生からは実施上の様々な工夫が挙げられた一方、多くの者が困ったことがあったと回答した。困った点としては、通信環境のトラブルや、支援の様子が見えないために教員が早口になりやすいこと等が指摘された。

キーワード: 障害学生支援、オンライン授業、聴覚障害、遠隔情報保障、新型コロナウイルス

I. はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大を防止するため、大学等の高等教育機関ではオンライン授業の実施等、様々な取り組みが行われている。そして、一般社団法人全国高等教育障害学生支援協議会(2020)は、「教育活動のオンライン化に当たって、障害のある学生の個々のニーズにあわせた支援が提供されること」を各高等教育機関に対して要請している。

コロナ禍における障害学生支援については、先行事例がない中で各高等教育機関が試行錯誤しながら進めているのが現状である。そのため、障害学生の修学やその支援について、どのような変化が起きているのかは十分に検討されていない。この点を明らかにすることは、コロナ禍にあっても障害学生の学びを保障していく上で重要である。

そこで筆者らは、宮城教育大学教員キャリア研究機構プロジェクト研究の一環として、学内の障害学生及びノートテイク等の支援学生を対象に、オンライン授業の受講または支援の状況に関するアンケート調査を行った。本稿では、聴覚障害学生への対応に焦点化し、まず学内でどのように遠隔情報保障が実施されたかについて報告する。そして、先述の学内調査で得られたデータをもとに、オンライン授業における聴覚障害学生支援の工夫と課題について整理する。

II. 宮城教育大学で実施された聴覚障害学生への遠隔情報保障

1. リアルタイム授業(同時双方向型)の場合

基本的には、聴覚障害学生が受講するリアルタイム授業(Google MeetやZoom等)に2名の支援学生がアクセスし、筑波技術大学が開発したT-TAC Captionを利用して遠隔ノートテイクを行った(Fig. 1)。ただし、

*宮城教育大学教育学部, **宮城教育大学しょうがい学生支援室, ***宮城教育大学大学院教育学研究科

一部の授業においては、UD トーク等の音声認識システムによる自動文字起こし機能を活用し、誤認識・誤変換を支援学生が修正しながら遠隔情報保障を行う場合もあった。

そして、支援学生による遠隔ノートテイクが実施される授業の担当教員には、宮城教育大学しょうがい学生支援室から以下の4点について文書にて説明・依頼した。

- ① 極力ゆっくり話していただきたい。
- ② 当日のオンラインシステム（Google Meet等）にノートテイク（支援学生）が入室することを認めていただきたい。
- ③ 担当するノートテイクの氏名は事前に伝えるので、ノートテイクを指名しないよう留意していただきたい。
- ④ 確実な情報を聴覚障害学生に伝えるため、ノートテイクにも事前に資料の共有をさせていただきたい。

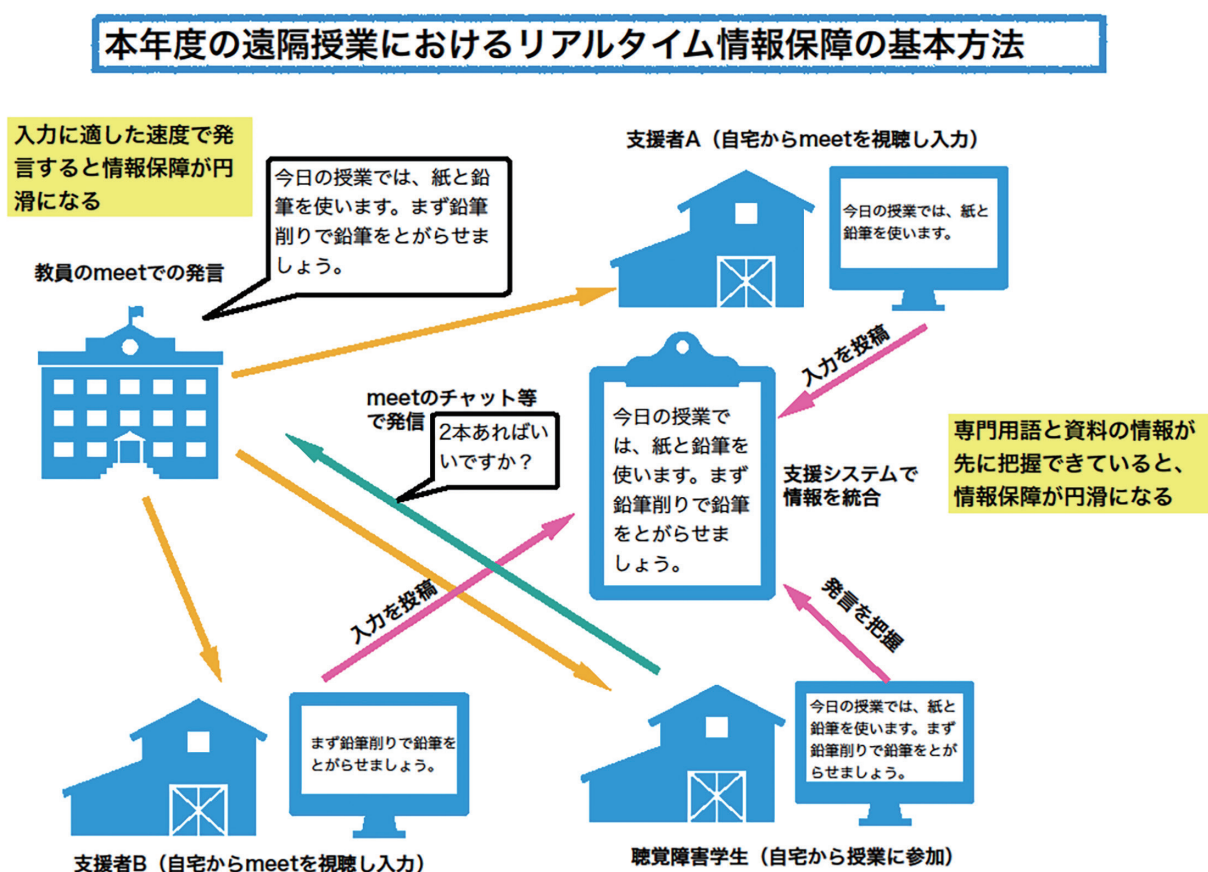


Fig.1 遠隔ノートテイクの実施方法

永井伸幸准教授（宮城教育大学）が作成。「meet」とは、Google Meetの略である。

その一方、個々の教員が独自に遠隔情報保障の方法を考案し、実践したケースもいくつかあった。まず、講義場面での対応について2つの事例を紹介する。1つ目は、しょうがい学生支援室から派遣される支援学生ではなく、ティーチング・アシスタントの学生を活用して Google ドキュメントの音声入力による遠隔情報保障を行う方法である。この取り組みの大きなメリットは、授業内容に係る専門性が高いティーチング・アシスタントが自動文字起こしの修正等を行うため、支援学生と比べて専門用語の理解と対応がスムーズだったと考えられる点である。2つ目は、英語が使用される授業において、Google ドキュメントと Google Meet の英語字幕の機能による遠隔情報保障を行う方法である。この方法を提案した教員からは、具体的な手順について支援学生にレクチャーしてもらった。

そして、グループワーク等の場面での対応について2つの事例を紹介する。1つ目は、Google Meet において学生間でやりとりする際に、聴覚障害学生が入ったグループに対して、チャットを使って文字でやりとりするよう教員が自発的に指示を出していたというケースである。2つ目は、グループごとに映像を作成するという課題が出された際に、教員が受講学生全体に対して、映像に字幕を付けるところまで指示したというケースである。その教員の話によると、受講学生は字幕付けを行うための ICT (情報通信技術) の活用を楽しみながら、工夫をして課題に取り組んでいたとのことである。

2. オンデマンド授業 (動画配信型) の場合

しょうがい学生支援室から各教員に対して、配信する動画の字幕付けもしくは文字起こしを依頼するとともに、YouTube を用いた字幕付けの方法について紹介した。また、字幕付けや文字起こしの作業が難しい場合は、しょうがい学生支援室で対応するので相談していただきたい旨を周知した。

Ⅲ. 聴覚障害学生及び支援学生へのアンケート調査

調査目的は、障害学生がオンライン授業を受講する際の利点と課題を、障害学生本人及び支援学生の状況をもとに明らかにすることである。Google フォームを用いた無記名式アンケートを作成し、各学期末 (1 回目は 2020 年 9 ～ 10 月、2 回目は 2021 年 2 ～ 3 月) に実施した。アンケートの冒頭には、回答データは個人が特定されない形で処理し、教員キャリア研究機構プロジェクト研究として報告する旨を記載した。

本稿では、この調査で得られたデータのうち、聴覚障害学生支援に関する部分を取り上げることとする。分析に用いるのは、聴覚障害学生のべ 9 名 (前期末 5 名、後期末 4 名)、支援学生のべ 50 名 (前期末 27 名、後期末 23 名) の回答である。なお、のべ数としているのは、前期末と後期末のいずれにおいても回答した学生がいる可能性があるためである。

1. 聴覚障害学生の調査結果

(1) オンライン授業のメリット・デメリット

Table 1 に示す 7 項目について、自身の障害の面から見たときにどうであったかを 3 択 (「良かった」「悪かった」「特に関係ない」) で尋ねた。その結果、特に「②オンデマンドの場合、自分の都合に合わせて視聴できる」について肯定的な評価が得られた。一方、「⑦周囲に学生がいない」のように、評価が分かれた項目もあった。

さらに、自由記述で良かった／悪かったと思う点や受講しやすかった／受講しにくかった点を尋ねたところ、授業内容の理解の深まりや、周囲の理解の広がり・深まり等のメリットが挙げられた一方、情報過多による負担感、通信環境のトラブルによる遠隔ノートテイクの遅延等のデメリットも指摘された。また、近くに人がいないことで心細さを感じたという意見もあった。回答の詳細については、以下のとおりである (一部、筆者らによる修正あり)。

Table 1 オンライン授業に関する聴覚障害学生の評価

	前期 (N=5)			後期 (N=4)		
	良かった	悪かった	特に関係ない	良かった	悪かった	特に関係ない
① 自宅や好きな場所で受講できる	3	0	2	4	0	0
② オンデマンドの場合、自分の都合に合わせて視聴できる	5	0	0	4	0	0
③ オンデマンドの場合、何度も視聴できる	4	0	1	3	0	1
④ 資料の多くがサイト上にあがっている	5	0	0	2	1	1
⑤ 情報量が多い	2	2	1	2	0	2
⑥ リアルタイムの場合、手軽に参加ができる	3	0	2	3	0	1
⑦ 周囲に学生がいない	2	3	0	1	1	2

《良かったと思う点や受講しやすかった点》

- 対面形式の場合、講義内容を理解するためにはテイク（または先生の口）を見て、ノートをとるためには視線をノートに移す必要がある。そのため、内容についていくのが大変だったり、先生が言っていることと自分が書いていることのタイムラグが激しくなることがある。その点では、オンデマンドは止めながら視聴することが可能なため、内容を深く理解しながらノートをとることができて良かった。
- オンライン授業になってから先生と直接メールでやりとりする回数が自然と増えたので、情報保障が必要な学生もいるとかなり認識してもらえるようになった。
- 自分以外の学生（健聴者）も障害を理解し、工夫してくれた。
- オンラインのほうが積極的に発言できる。
- グループワークをチャットで行うことで、対面形式と違ってテイク経由で意見を述べたり聞いたりすることがなくなり、その分タイムラグもない状態で直接他の学生と深い議論ができるようになった。
- チャットが使えるので、それを活用してコミュニケーションがとれた。
- 授業が早く終わった後にテイク達と情報交換ができた。機器の接続関係の問題で先生が途中で話すのを休むときがあったので、その時にも要望等を交換することができた。

《悪かったと思う点や受講しにくかった点》

- 情報過多で、画面も多く表示する必要があるため、見づらいことが多く負担も大きかった。
- 情報が多く入手できたのは良かった反面、多すぎて管理が大変で期限を過ぎてしまうことも少しあった。
- インターネット環境が悪いときは、遠隔ノートテイクも重くなったりラグが生じたりして見づらいことがあった。
- 電波が悪くて先生のマイクがテイクに届かなく、テイクが遅れたことがある。
- グループディスカッションのテイクが難しかった。
- 近くに友達がいなくて情報保障が追いつかなかったとき、急なアクシデントのとき、テイクしか頼れる相手がいなくて少し心細かった。
- 大学ならではの雰囲気味わえず、心細かった。
- 顔が見えない。

(2) 聴覚障害学生自身による働きかけ

障害学生に対して授業で配慮してほしい内容について、学内の障害学生支援関連部署から教員へ伝達するだけでなく、学生本人からも教員さらには他の受講学生へ説明することは、円滑な授業参加を図るにあたって重要な工夫のひとつである。そこで、オンライン授業だからこそ自分のことを理解してもらうために授業関係者（教員、他の

受講学生、支援学生等)に働きかけたことはあるかと尋ねたところ、前期末は5名全員、後期末は4名中2名が「ある」と回答した。主な働きかけの内容については以下のとおりである(一部、筆者らによる修正あり)。

- 授業の初回に、聴覚障害があり、テイカーと一緒に Zoom や Google Classroom に入ってもらっていることをチャットで受講している全学生、先生に連絡した。
- 全体のチャットでどのような配慮が必要なのかを説明した。
- グループ活動時、「自分は耳が聞こえにくく、皆が話した内容をボランティアに文字起こししてもらったものを見ている。そのため多少のラグが発生することを知っていてほしい」と言ったことが数回あった。
- 指名してから発言するまでの時間に余裕を持たせるようにしてもらった。また、発言時に誰の発言かが分かるように、最初に自分の名前を言うようにしてもらった。
- グループワークがあったので、テイカーの負担を減らすためにディスカッションでは主にチャットをするようお願いした。逆に受講学生から提案されることもあり、とてもありがたかった。
- 支援学生とは連絡をとり合って、こうしたほうが良いという相談を行っていた。
- 動画がある場合は、先生に字幕を付けてもらうようお願いすることがあった。

(3) 授業担当教員に気をつけてほしいこと

オンライン授業へ円滑に参加するにあたり、教員に気をつけてほしいことはあるかと尋ねたところ、前期末は5名中4名、後期末は4名中2名が「ある」と回答した。のべ6名が挙げた主な内容は以下のとおりで(一部、筆者らによる修正あり)、遠隔ノートテイクへの理解や配慮を求める内容が特に多かった。そして、これらの回答からは、教員・聴覚障害学生・支援学生がそれぞれ異なる場所にいるため、教員はノートテイクの状況が把握しにくく、聴覚障害学生も支援学生の姿を直接確認することができないというオンライン授業の問題点が浮き彫りとなった。

- テイクの様子が先生から見えないため、テイクをつけていることに対して忘れやすいかもしれない。テイクがついていることを忘れないでもらうとともに、こちらからも適宜チャットに書く等の工夫も必要だと思った。
- テイクが完全に置いていかれたときにチャットで「テイクが追いついていないのもう少しゆっくりめで話してもらえると助かります」と連絡することが多いが、なかなか気づいてもらえない。授業中も時々チャットを見るようにしてほしい。
- リアルタイム授業は、特に学生とのやりとりが白熱して早口になることが多いので、できるだけ冷静にゆっくり話すよう周知してほしい。
- グループワーク等はチャットやテイクの手間があり、普通の口頭でのやりとりより時間がかかるため、活動時間に余裕を持ってほしい。
- テイカーが通信接続できているか授業冒頭に確認してくれると助かる。
- 映像に字幕が付いていなかった。初回に先生から「音が出ているけど大した内容じゃないから大丈夫!」と言われたが、映像の中でたくさん会話がなされていたことをテイカーから教えてもらった。テイカーに感謝すると同時に、先生から教えてもらえなかったことに対して悲しく思った。

2. 支援学生の調査結果

(1) 遠隔情報保障の行いやすさ

2019年度以前にノートテイカーの登録を行った支援学生のべ44名に対して、対面時(教室内)と比べた場合の遠隔情報保障(遠隔ノートテイクの実施またはUDトーク等の音声認識システムによる自動文字起こしの修正作業)の行いやすさについて4択(「やりやすかった」「やりにくかった」「変わらなかった」「分からない」)で尋ねた。結果はTable 2のとおりであり、いずれの学期末においても約4割の支援学生が「やりにくかった」と回答していた。

Table 2 対面時と比較した遠隔情報保障の行いやすさに関する支援学生の評価

	前期 (N=24)	後期 (N=20)
①やりやすかった	4	6
②やりにくかった	10	9
③変わらなかった	9	4
④分からない	1	1

(2) 遠隔情報保障を行うにあたって工夫・留意したこと

工夫・留意したことがあるかを尋ねたところ、前期末は27名中14名、後期末は23名中10名が「ある」と回答した。そして、「ある」と回答した支援学生から工夫・留意したことに関する自由記述回答がのべ30件得られた。Table 3は、その自由記述回答を内容ごとに整理したものである。「事前にレジュメから多く使いそうな用語をパソコンに単語登録し、略語で変換されるようにしておいた」「指示語はなるべく言い換えて入力する」といった【聴覚障害学生に速く分かりやすく伝えるための工夫】や、「はじめはどちらが入力し、同じ所を入力したらどちらが消すかを決めた」といった【ペアテイクとの連携】に関する内容が多く挙げられた。また、【安定した通信環境の確保】等、オンライン授業特有の工夫・留意点もあった。

Table 3 支援学生が遠隔情報保障を行うにあたって工夫・留意したこと

カテゴリーと回答例（一部、筆者らによる修正あり）	のべ件数
【聴覚障害学生に速く分かりやすく伝えるための工夫】 <ul style="list-style-type: none"> ・専門用語が多く出てくる授業だったので、事前にレジュメから多く使いそうな用語をパソコンに単語登録し、略語で変換されるようにしておいた。 ・指示語はなるべく言い換えて入力する。 ・話題が変わるときには1行空ける。 ・英語の授業で、日本語のテイクをする場面とテイクをせずに Google Meet の字幕を見てもらう場面があり、字幕を見てもらうときの合図に「★」を使った。 ・英語のテイクで、先生の発言は音声認識、学生たちの発言は認識されにくいので手入力にして使い分けた。 	16
【ペアテイクとの連携】 <ul style="list-style-type: none"> ・はじめはどちらが入力し、同じ所を入力したらどちらが消すかを決めた。 ・自分がどこまで打ちたいのかペアテイクに伝わりやすいように、できるだけ短い文で区切って入力した。 ・ペアテイクの入力状況を常に確認して、変換等に困って時間がかかりそうな場合はすぐにカバーできるように意識した。 	8
【授業後の振り返り】 <ul style="list-style-type: none"> ・授業後に、今日の反省を何回かしたことがある。 ・聴覚障害学生やペアテイクとの相互フィードバック等。 	2
【教員・他の受講学生への働きかけ】 <ul style="list-style-type: none"> ・先生にゆっくり読み上げてもらうようお願いした。 ・先生や他の学生とのやりとりにもこちらから積極的に声をかけて、聴覚障害学生が参加しやすいように配慮をお願いした。 	2
【安定した通信環境の確保】 <ul style="list-style-type: none"> ・できるだけ通信状態の良い環境で取り組むよう心がける。 ・通信環境が良くなるよう、パソコン以外の機器（スマホ・据え置き型ゲーム機）の電源を切った。 	2

(3) 遠隔情報保障を行うにあたって困ったこと

困ったことの有無を尋ねたところ、前期末は27名中22名、後期末は23名中17名が「ある」と回答した。さらに、どのような点で困ったかについて、のべ49件の自由記述回答が得られた。Table 4は、その自由記述回答を内容ごとに整理したものである。「通信環境が悪いときに、講義のGoogle Meetの接続が切れたりT-TAC Captionに入力できなくなったりした」「テイク中にパソコンが一時的にフリーズした」といった【通信環境やパソコン等のトラブル】が多くの学生から指摘された。また、【教員や他の受講学生の発言が早口・聞きとりづらい】【聴覚障害学生との意思疎通やペアテイクとの連携の難しさ】【教員に支援学生として認識してもらえない】等、教員・聴覚障害学生・支援学生がそれぞれ異なる場所にいることで生じるあるいは深刻化する問題点多岐にわたって挙げられた。

Table 4 支援学生が遠隔情報保障を行うにあたって困ったこと

カテゴリーと回答例（一部、筆者らによる修正あり）	のべ件数
【通信環境やパソコン等のトラブル】 ・通信環境が悪いときに、講義のGoogle Meetの接続が切れたりT-TAC Captionに入力できなくなったりした。 ・テイク画面のバグ。（再接続したらすぐ直った） ・テイク中にパソコンが一時的にフリーズした。	23
【教員や他の受講学生の発言が早口・聞きとりづらい】 ・テイクしている姿が見えない分、先生や学生の話すスピードが速くなってしまい、テイクが追いつけないことが多々あった。 ・現地の音が聞こえにくい。 ・通信状況によって先生の声が聞き取りやすかったり聞きとりにくかったりすることがあった。	7
【聴覚障害学生との意思疎通やペアテイクとの連携の難しさ】 ・聴覚障害学生の反応が分からず、先生の話を一言も漏らさず伝えるべきか、「読み上げ」「繰り返し」のように省略してもいいのか迷った。（特にテストや課題の手順を説明しているとき） ・自分とペアテイクが同じ内容を同時に入力してしまい、その後お互い譲って同時に消してしまったり、また入力して…みたいな流れが何度かあった。やはり同じ場にいないとペアテイクのタイミング等を見極めるのが難しい。 ・ペアテイクや聴覚障害学生が近くにいないため、どのくらい伝わっているか、どのくらいで区切るのがやりやすいのか等、普段その場の空気感で分かっていたものが分からない。	7
【資料読み上げ時の対応への戸惑い】 ・画面に映ったスライド資料とテイク画面を同時に見ながらテイクできる力量が自分になかったこともあるが、スライド資料にもともとある文章まで（打つ必要はないのに）ひたすら打ち続けていたことが多々あり大変だった。スライド資料を読み上げるときは教えていただくよう先生に言ったが忘れられることが多く、テイクの負担が大きかった。 ・対面授業では資料を机の上に広げ、その横でテイクをできたが、オンラインは資料を見るためにブラウザ等を切り替えなければならなかったため、そのタイミングが掴みにくかった。	4
【自動文字起こしの修正作業における問題点】 ・UDトークが先生以外の人（例えば学生）が話しているときに認識できないこと。 ・Google Meetの字幕機能に頼ることが多かったが、英語の音声再生時に先生が英語で相槌を打ってしまうとそれも認識されてしまい、意味が伝わりにくい字幕になっていたのではないと思う。	4

<p>【リアルタイム授業における動画使用への対応の難しさ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Google Meetでの数十人規模の授業で、先生が動画を画面共有で提示したが、音声も映像も途切れ途切れになっていて、その間はテイクできなかった。 ・授業中に「時間内でYouTubeを見てきて」という指示があったとき、字幕なし映像の場合、テイクもその映像を見ながらリアルタイムで文字起こしをするという状況になるが、ペアテイクと動画の再生タイミングがずれるため、テイクが重複する・テイクしていない部分ができるということがあった。 	2
<p>【教員に支援学生として認識してもらえない】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・そもそも授業を行う部屋に入れない。先生に認証されない。 ・先生がGoogle Meetの挙手機能を使って学生の反応を見ているとき、テイクだと気づかれなかったのか「全員は手が挙がりませんね？」と授業を若干止めてしまったこと。 	2

(4) 授業担当教員に気をつけてほしいこと

遠隔情報保障を行うにあたり、教員に気をつけてほしいことはあるかと尋ねたところ、前期末は27名中21名、後期末は23名中15名が「ある」と回答した。そして、「ある」と回答した学生から、気をつけてほしいことに関する自由記述回答がのべ47件得られた。主な内容はTable 5に示すとおりで、多くの支援学生が挙げていたのは、**【できるだけ明瞭にゆっくり話してほしい】**ことであった。これ以外にも、教員の話し方については**【指示語を極力使わないでほしい（説明箇所を明確にしてほしい）】****【話題・教材が切り替わる際や資料を読み上げる際に予告してほしい】**等の要望が挙げられた。また、**【その他】**として「特別講師を呼ぶ場合は、随時その方ともテイク利用者（聴覚障害学生）がいることを情報共有して、話し方等を少しだけでも意識してもらえると助かった」というような、授業者間で聴覚障害学生の存在や遠隔情報保障の方法・留意点に関する共通認識が十分に形成されていないことを指摘する意見もあった。

Table 5 支援学生が遠隔情報保障を行うにあたって授業担当教員に気をつけてほしいこと

カテゴリーと回答例（一部、筆者らによる修正あり）	のべ件数
<p>【できるだけ明瞭にゆっくり話してほしい】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遠隔だとテイクをしていることを実感にくいのか話すスピードが速い先生がいたので、ゆっくり話してほしい。 ・テイクをしている姿が見えない分、「話す速さを遅くしてほしい」と言ってもすぐ元に戻ってしまうことがあるので、なるべくゆっくり話してほしい。 ・先生が一方向的に話し続けることが多かったので、適当なところで区切ったり、話す速さをゆっくりにしてほしい。 ・なるべく言い淀みがなく、少しゆっくりめの速さで話していただけると良いのかなと思った。 	20
<p>【指示語を極力使わないでほしい（説明箇所を明確にしてほしい）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こそあど言葉を使わずに話してほしい。対面の場合は、それが何を示しているか分かるが、オンラインだと資料がすぐに読めないこともあって推測できない。 ・資料を画面共有して指示語を使う際は、ドラッグで網掛けをしたり、拡大したりしてどこを扱っているのか分かりやすくしてほしい。 ・資料を画面共有しながら話す際にできるだけポインターのようなものを使って、解説している箇所を示してほしい。 	6

【支援学生が存在や支援学生からの発信に気づいてほしい】 ・テイクであることを認識してほしい。共通の支援者アカウントを作成したほうが良いのではないと思った。 ・テイクが追いつけない際にもう少しゆっくり話すようにお願いすることがあるので、時々チャットを確認してほしい。	5
【話題・教材が切り替わる際や資料を読み上げる際に予告してほしい】 ・話題が行き来しすぎると切り替えづらいので、一呼吸おくか話題が変わることを伝えるかの対応をしてほしい。 ・スライド資料や画面共有していない教科書等を読み上げるときは声をかけてほしい。	3
【やりとりにおいてタイムラグが生じることを理解してほしい】 ・聴覚障害学生と先生が直接やりとりする場合、テイクが間に入ることで生じる「間」を理解してほしい。 ・Google Meetで「テイクの人、大丈夫ですか？」と先生に聞かれることがあるが、そのときも文字を打ち続けている状態なのでなかなかチャットに反応できず、お互いがもっと簡単に意思疎通できれば良いと感じた。	3
【重要事項や専門用語等は教員からも視覚化してほしい】 ・課題やテスト等の重要な連絡は、口頭だけでなく、パワーポイントや資料等の文字でも示してほしい。 ・専門用語や難しい単語はチャットを使ってできるだけ打ってほしい。	2
【リアルタイム授業での動画・文字起こし資料の使用について留意してほしい】 ・画面と音声が固まるため、動画は画面共有ではなくYouTubeで限定公開する等の方法で示してもらいたい。 「〇時〇分になったらGoogle Meetに戻ってきて」等、時間を決めてもらえれば学生も対応できると思う。 ・聴覚障害学生と共有した文字起こし資料が授業内容の変更のためかわれられない場面が多々あった。そのため、文字起こしを頼んでいる場合は、いつの授業で使うのかを事前にしょうがい学生支援室へ連絡してもらいたい。	2
【その他】 ・パソコン画面をGoogle MeetやZoomの画面とテイク画面とに分割しているので、画面共有されたスライド資料の文字が小さいと読みにくい。1枚あたりのスライド資料の情報量を少なめにし、文字を大きめにしてほしい。 ・パソコンに用語の変換登録をするため、事前に授業のスライド資料をシェアしてほしい。 ・特別講師を呼ぶ場合は、随時その方ともテイク利用者（聴覚障害学生）がいることを情報共有して、話し方等を少しだけでも意識してもらえると助かった。	6

IV. おわりに

聴覚障害学生がオンライン授業を受けるにあたって直面する諸問題に対しては、遠隔ノートテイク、グループワークにおけるチャットの活用、動画の字幕付け等によって、一定程度カバーすることができた。そして、聴覚障害学生は、通信環境のトラブルや周囲に人がいないことによる心細さはあったものの、オンライン授業の利点も感じていることが、アンケート調査の結果からうかがわれた。例えば、リアルタイム授業については、グループワークでチャットを使用したことによって他の受講学生と直接議論ができた点が、オンデマンド授業については、自分のペースで動画を視聴することが可能なため、授業内容を深く理解しながらノートをとることができた点が、良かったこととして挙げられていた。

支援学生へのアンケート調査の結果からは、遠隔情報保障の際に様々な工夫が行われていたことが示された一方、多くの者が困ったことがあったという事実が明らかとなった。そして、困ったこととしては、通信環境やパソコンのトラブルのみならず、支援学生が遠隔ノートテイクに取り組んでいる様子が教員側から見えないことで、教員の話すスピードが速くなりやすいという点等も挙げられた。教員が早口になりやすい点は、教員に気をつけてほしいこととして聴覚障害学生及び支援学生の双方から指摘された内容のひとつでもあった。また、教員が早口になるこ

とで遠隔ノートテイクが追いつかない場合の対策として、Google Meet のチャット等で状況を確認することが聴覚障害学生及び支援学生より提案された。

以上のように、今回の調査を通して学生側の視点から遠隔情報保障の改善に向けて有益な示唆を得ることができた。そして、様子が見えない状況にありながらも、いかに聴覚障害学生及び支援学生の存在を心に留めながら教員が授業を展開していけるかが、遠隔情報保障の質を左右する大きなポイントになるだろう。

謝辞

アンケート調査にご協力いただいた学生の皆様、本稿の執筆にあたって資料 (Fig. 1) を提供してくださった永井伸幸先生に心より御礼申し上げます。

文献

一般社団法人全国高等教育障害学生支援協議会 (2020) 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) と高等教育機関における障害学生支援に関する声明文. <https://ahead-japan.org/covid19/files/ahead-covid19-statement.pdf> (公開日: 2020年5月15日).